

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 4 号 (6 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 ＜平年比（前年比）＞	作物名	病虫害名	予想発生量 ＜平年比（前年比）＞
イ ネ	葉いもち	やや多(並)	チ ャ	チャノキイロアザミウマ	山城：並(並)
	ニカメイチュウ (第 1 世代)	やや多(やや多)			丹波：並(並)
	ヒメトビウンカ	並(並)		カンザワハダニ	丹後：並(やや少)
	縞葉枯病	並			山城：並(やや多)
ナ シ	ツマグロヨコバイ	少(少)	クワシロカイガラムシ	チャノミドリヒメヨコバイ	丹波：並(やや少)
	イネミズゾウムシ	並(やや多)			丹後：並(多)
ブドウ	黒斑病	やや多(やや多)			山城：やや多(やや多)
	黒星病	やや多(多)			丹波：並(並)
カ キ	ハダニ類	並(並)	果 菜 類	疫病・褐色腐敗病	丹後：多(やや多)
					山城：並(少)
カンキツ	べと病	やや多(やや多)	キュウリ	丹波：並(やや多)	丹後：やや少(やや多)
果樹全般	落葉病	やや多		斑点細菌病	やや多(やや多)
	うどんこ病	やや少(並)	果 菜 類	うどんこ病	並(並)
	ハダニ類	やや少(並)	ネ ギ	さび病	やや多(多)
	カメムシ類	やや多(やや多)		ネギハモグリバエ	やや少(並)
チ ャ	炭疽病	山城：やや多(やや多)	野菜類	ネギアザミウマ	やや少(やや少)
		丹波：多(やや多)		アブラムシ類と モザイク病	やや多(多)
	もち病	丹後：並(やや少)	果 菜 類	ハダニ類	やや多(多)
		山城：並(やや少)		アザミウマ類	やや少(やや少)
		丹波：並(並)	アブラナ 科野菜	コナガ	やや多
	チャノコカクモンハマキ	丹後：並(並)			
		山城：やや少(少)			
	チャノホソガ	丹波：やや多(多)			

※平年とは過去 10 年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	18
参考	
Ⅰ 近畿地方の気象 1 か月予報	20
Ⅱ 用語の定義	20
Ⅲ 予報本文の見方	21

農作物病虫害情報 サービスホームページ https://www.pref.kyoto.jp/byogai/ 	病虫害予察情報等メール サービス https://www.pref.kyoto.jp/bojoshu/mailservice/mailservice.html 
---	---

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、補植用苗で発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
確認ほ場率(%)	0.0	2.2

（２）前年の穂いもちの発生量は平年並。

項目	前年9月	平年値
発病株率(%)	6.4	11.5
確認ほ場率(%)	26.7	39.4

（３）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）空気伝染し、発病適温は14～30℃（最適25℃）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑が進展したり、胞子の形成量が高まったりする。
- （２）通常、6月第5半旬頃が初発時期である。
- （３）補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。
- （４）ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- （５）長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

2 ニカメイチュウ（第1世代）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）前年8月に第2世代幼虫が発生し、平年比多かった（＋）。

項目	前年8月	平年値
被害株率(%)	0.8	0.1

（２）5月第2半旬現在、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺数は京田辺市、亀岡市及び京丹後市で誘殺を認めていない（例年並）。

地域	4月1半旬～5月2半旬の誘殺数(頭)	
	本年	例年値
京田辺市	0	1.5
亀岡市	0	3.4
京丹後市	0	0.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は5月第5～6半旬頃である。
- (2) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (3) 稲ワラ（敷ワラ）を使用する野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 ヒメトビウンカとイネ縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年並（前年並）
イネ縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカの越冬虫の発生は確認していない（平年並）。

項目	本年	平年値
虫数(匹)	0.0	0.1
確認ほ場率(%)	0.0	5.8

* 虫数は、20回振りすくい取り調査。

- (2) 前年は、イネ縞葉枯病の発生を認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況が翌年の発生に影響する。
- (2) 通常、ヒメトビウンカ第1世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
- (3) イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) ツマグロヨコバイの越冬虫数、確認ほ場率ともに平年比少ない（－）。

項目	本年	平年値
虫数(頭)	0.1	0.7
確認ほ場率(%)	11.1	25.0

* 虫数は、20回振りすくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4 齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、イネ萎縮病等を媒介する。

5 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯への誘殺数は、京田辺市で平年並、亀岡市で平年比少なく（－）、京丹後市で平年比やや多かった（＋）。

地域	7月1半旬～8月6半旬の誘殺数(頭)	
	前年	平年値
京田辺市	54	52.4
亀岡市	92	233.3
京丹後市	67	52.3

(2) 5月中旬現在、本田での発生量は平年比やや少ない(－)。

項目	本年	平年値
食害株率(%)	24.3	32.4
虫数(頭/25株)	0.4	3.5
確認ほ場率(%)	80.0	69.7

(3) 越冬世代成虫の予察灯への初飛来は、京田辺では5月13日現在、飛来はなく(平年：5月10日)、亀岡では4月19日で平年比早く(平年：4月29日)、丹後では4月21日で平年比早かった(平年：5月14日)。

地域	予察灯への初飛来日	
	本年	平年値
京田辺市	未飛来	5月10日
亀岡市	4月19日	4月29日
京丹後市	4月21日	5月14日

(4) 5月第3半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への誘殺数は京田辺市、亀岡市及び京丹後市で平年並であった。

地域	4月1半旬～5月2半旬の誘殺数(頭)	
	本年	平年値
京田辺市	0	0.7
亀岡市	11	83.9
京丹後市	6	19.5

*** 今後注意すべきその他の病虫害等は p. 18 を参照**

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在の発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	1.0	1.8
発生ほ場率(%)	40.0	49.5

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く(+)、日本海側では平年並か多く(+)、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 葉が繁茂する梅雨期は、本病感染の最盛期であり、降雨が続くと被害が多くなる。薬剤防除を徹底する。
- (2) 果実の感染を防ぐため、大袋掛けは小袋が破れる前に必ず行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率（％）	0.5	1.0
発生ほ場率（％）	50.0	26.5

（２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く（＋）、日本海側では平年並か多く（＋）、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発病適温は１５～２５℃である。
- （２）雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- （３）赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。
- （４）幼果や葉に発病を認めた場合、取り除いてほ場外に持ち出して処分する。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率（％）	0.00	0.02
発生ほ場率（％）	0.0	1.8

（２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く（＋）、日本海側では平年並か多く（＋）、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- （２）発病適温は２２～２５℃である。
- （３）５～６月に多雨であると多発生となりやすい。
- （４）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- （５）新しく柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

4 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

（１）前年１０月の調査では、発生を認めていない（平年並）。

項目	前年10月	平年値
発病葉率（％）	0.0	0.3
発生ほ場率（％）	0.0	16.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く(+)、日本海側では平年並か多く(+)、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 角斑落葉病と円星落葉病があり、前者の発病は7月から、後者は9月から見られる。主な感染時期は前者が6月中旬から7月中旬で、後者が5月下旬から7月上旬である。前年の被害葉(落葉)に形成された前者は分生子、後者は子のう胞子が第一次伝染源となる。降雨の多い年ほど被害が多い。感染時期の防除を徹底する。

5 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない(平年比少ない(-))。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	1.8
発生ほ場率(%)	0.0	50.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く(+)、日本海側では平年並か多く(+)、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の被害葉(落葉)や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。
(2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。

6 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並(前年並)
カンキツ 平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、ナシでは発生を認めず(平年並)、カンキツでは発生を認めていない(平年比少ない(-))。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0
カンキツ	寄生葉率(%)	0.0	3.7
	発生ほ場率(%)	0.0	40.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側では平年比多く(-)、日本海側では平年並か多く(-)、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を連用した園では天敵も減少するため、ハダニ類が多発する場合があるので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統の薬剤の連用は避ける。

7 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) チャバネアオカメムシの越冬量は、山城地域で認めず（平年比少ない（－））、丹波地域で平年比やや多い（＋）、丹後地域で認めていない（平年並）。

地域	本年	平年値
山城	0.00	0.79
丹波	0.46	0.38
丹後	0.00	0.26

※平均生存個体数（頭/地点）

- (2) 5月中旬現在、ナシでの被害は平年比やや多い（＋）。

項目	本年	平年値
被害果率（％）	0.4	0.2
被害ほ場率（％）	22.2	5.6

- (3) 5月第2半旬現在、チャバネアオカメムシの予察灯（B L）への誘殺は京田辺市及び亀岡市で認めず（平年並）、京丹後市で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	4.1
亀岡市	0.0	2.9
京丹後市	5.0	6.7

※誘殺数：4月第3半旬～5月第2半旬の合計値

- (4) 5月第2半旬現在、チャバネアオカメムシのフェロモントラップへの誘殺は京田辺市及び亀岡市で平年比やや多く（＋）、京丹後市で平年比多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	3.1	1.8
亀岡市	22.0	16.7
京丹後市	15.1	1.4

※誘殺数：4月第3半旬～5月第2半旬の合計値

- (5) 5月第2半旬現在、ツヤアオカメムシの予察灯（B L）への誘殺は京田辺市で認めず（平年比やや少ない（－））、亀岡市及び京丹後市で認めていない（平年並）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	2.4
亀岡市	0.0	0.0
京丹後市	0.0	0.2

※誘殺数：4月第3半旬～5月第2半旬の合計値

- (6) 5月第2半旬現在、クサギカメムシの予察灯（ＢＬ）への誘殺は京田辺市及び亀岡市で認めず（平年並）、京丹後市で認めていない（平年比やや少ない（－））。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	0.0
亀岡市	0.0	0.1
京丹後市	0.0	2.4

※誘殺数：4月第3半旬～5月第2半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来して局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
 (2) 夜行性であるため、夕方の防除が効果的である。
 (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

*** 今後注意すべきその他の病虫害等は p. 18 を参照**

チャ

1 炭疽病

予報内容	発生量：山城	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹波	平年比多い（前年比やや多い）
	丹後	平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城で平年並、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数（㎡当たり）	2.7	2.4
	発生ほ場率（％）	38.5	31.6
丹波	発病葉数（㎡当たり）	0.2	1.3
	発生ほ場率（％）	16.7	6.7
丹後	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.7
	発生ほ場率（％）	0.0	17.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は太平洋側では平年比多く（＋）、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
 (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
 (3) 防除適期は、二番茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 もち病

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年並）
丹後 平年並（前年並）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、山城、丹波及び丹後で発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.01
	発生ほ場率（％）	0.0	1.0
丹波	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0
丹後	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0

（２）前年１０月は、山城、丹波及び丹後で発生を認めなかった（平年並）。

地域	項目	令和6年10月	10月の平年値
山城	発病葉数（㎡当たり）	0.0	1.9
	発生ほ場率（％）	0.0	4.5
丹波	発病葉数（㎡当たり）	0.0	1.7
	発生ほ場率（％）	0.0	11.7
丹後	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0

（３）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は太平洋側では平年比多く（＋）、日本海側では平年並か多く（＋）、日照時間は太平洋側では平年比少なく（＋）、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
- （２）気温２０℃前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。
- （３）常発地や一番茶摘採後に病葉が認められる園では注意する。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比多い）
丹後 平年比多い（前年比多い）
次世代幼虫ふ化時期：
山城：７月第３半旬～７月第４半旬（平年比遅い）
丹波：６月第６半旬～７月第２半旬（平年比やや遅い）
丹後：６月第６半旬～７月第２半旬（平年並）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、山城、丹波及び丹後で発生を認めていない（平年並）。

（２）前年１０月の発生は山城で平年並、丹波で平年比多く（＋）、丹後で平年比やや多い（＋）。

地域	項目	令和6年10月	10月の平年値
山城	綴葉数(㎡当たり)	0.3	0.4
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.01
	発生ほ場率(%)	19.0	13.9
丹波	綴葉数(㎡当たり)	9.2	2.2
	幼虫数(㎡当たり)	2.3	0.4
	発生ほ場率(%)	100.0	42.3
丹後	綴葉数(㎡当たり)	0.8	0.4
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.03
	発生ほ場率(%)	25.0	10.0

(3) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比少なく(－)、綾部市で平年並、京丹後市では平年比多い(＋)。

場所	項目	本年	平年(例年)値
宇治市		243.0	1090.6
綾部市	誘殺数(頭)	406.0	526.2
京丹後市		351.1	41.3

※誘殺数(頭)：4月第3半旬～5月第2半旬計

(4) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年比遅く、綾部市で平年比やや遅く、京丹後市で平年並。

(5) 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は太平洋側では平年比多く(－)、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代幼虫ふ化期は5月末～6月初めで、年4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤が掛かりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
- (3) ジアミド系及びIGR剤などの薬剤の効果が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない(前年比少ない)
 丹波 平年比やや少ない(前年並)
 丹後 平年比やや少ない(前年並)

次世代幼虫ふ化時期：

山城：6月第4半旬～6月第5半旬(平年比やや遅い)
 丹波：6月第4半旬～6月第5半旬(平年比やや遅い)
 丹後：6月第4半旬～6月第5半旬(平年並)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城、丹波及び丹後で発生を認めていない(平年比やや少)。

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側では平年比多く(+)、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
 (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
 (3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。
 (4) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 カンザワハダニ

予報内容	発生量：山城	平年並（前年比やや多い）
	丹波	平年並（前年比やや少ない）
	丹後	平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波及び丹後で発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	2.7	1.5
	寄生虫数(100葉当たり)	3.7	4.6
	発生ほ場率(%)	13.3	23.7
丹波	寄生葉率(%)	0.0	0.1
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	0.0	3.7
丹後	寄生葉率(%)	0.0	2.9
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	21.1
	発生ほ場率(%)	0.0	17.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側では平年比多く(+)、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30℃の範囲では高温の時ほど繁殖力が高いが、降雨により増殖が抑制される。
 (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

7 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容	発生量：山城	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹波	平年並（前年並）
	丹後	平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く(+)、丹波で平年並、丹後で平年比多い(+)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	1.0	0.6
	発生ほ場率（％）	25.0	14.8
丹波	寄生・被害芽率（％）	0.0	0.3
	発生ほ場率（％）	0.0	11.2
丹後	寄生・被害芽率（％）	2.0	0.0
	発生ほ場率（％）	66.7	0.0

- （２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は太平洋側では平年比多く（－）、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- （２）二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。
- （３）ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

８ クワシロカイガラムシ

予報内容	発生量：山城	平年並（前年比少ない）
	丹波	平年並（前年比やや多い）
	丹後	平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）５月中旬現在、発生量は山城及び丹波で平年並、丹後で発生を認めていない（平年比少）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率（％）	5.8	9.0
	発生ほ場率（％）	38.5	37.7
丹波	寄生株率（％）	1.7	4.8
	発生ほ場率（％）	33.3	27.3
丹後	寄生株率（％）	0.0	10.5
	発生ほ場率（％）	0.0	65.8

- （２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は太平洋側では平年比多く（－）、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間３回（一部山間部では２回）発生する。５月下旬頃の第１回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除が一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が１０日程度遅れる。
- （２）クワシロカイガラムシの防除適期である幼虫ふ化期は気象条件により前後し、発生状況も変化する。
茶園ごとのクワシロカイガラムシの防除適期が予測可能な「茶生育等予測マッピングシステム」が京都府で稼働中であるため活用する。
＊京都府内の茶園が対象。

使用料：無料

茶生育予測マッピングシステムの
概要は茶業研究所のHPのこちら→



登録はこちら→



- (3) 薬剤は株内部の枝に十分かかるように、1000リットル／10アール散布する。
- (4) 冬期にプルートMCを散布した茶園では、薬剤散布の必要はない。
- (5) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

*** 今後注意すべきその他の病虫害等は p.19 を参照**

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、トマト及びナスで発生を認めていない。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを張り、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと、初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。

3 キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病するケースが多い。
(2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
(3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

4 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、ナス及びキュウリで発生を認めていない（平年並）。
(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
(2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなりやすい。
(3) 過繁茂を避け、肥培管理に注意する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、小株及び大株で発生を認めていない（平年並）。
(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
(2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
(3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

6 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、アブラムシ類の発生量はキュウリで発生を認めず（平年比少ない）、ナス及びキャベツで平年比やや多く、ネギで平年比多い(+)。
(2) 5月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年比やや多い(+)。
(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するものもある。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

7 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量はキュウリで発生を認めず（平年並）、ナスで平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量はキュウリでは平年並、ナスでは平年比やや少ない（-）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等の種類もある。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、キャベツでの発生量は平年並。
- (2) 5月2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市及び亀岡市で平年比多く、京丹後市で例年比やや少ない（+）。
- (3) 予察灯60Wへの誘殺数は、京田辺市、亀岡市及び京丹後市で平年比多い（+）。
- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く（10～12回／年）、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- (2) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (3) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は小株で平年比やや少なく、大株で発生を認めていない（例年比やや少（－））。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は、

技術資料「ネギハモグリバエ防除マニュアル（2025年）」 →



平成31年3月13日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu201803_1.pdf

11 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は小株で平年並、大株で例年比やや少ない（－）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiumakanjyusei2021.pdf>

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について、発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 スクミリングガイ

- (1) スクミリングガイは在来タニシ類などに比べて貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕うんにより機械的に貝を破砕し密度を低下させることができる。土壌水分が少なく田面が硬くなる水稻収穫後の耕耘が最も殺貝効果が高い。また、土中に潜って越冬するが、その深さは6cm未満が大部分なので、耕うん深度は浅くてよいが、できるだけ土の硬い時期にピッチを小さくして（通常の1/2以下の作業速度が望ましい）いっきに耕うんすると殺貝効果が高くなる。さらに、越冬場所をなくすため、水路の泥上げを地域全体で行うと効果的である。
- (2) 苗を移植する前に、**田面を細かく耕うん**し、越冬した大きな貝を殺す。
- (3) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。
- (4) 地区内での発生が一部に限られる場合は、農業機械に付着した泥の含まれる本貝を未発生ほ場に持ち込み、発生を広げないことが重要。作業を行う順番を考慮するとともに、既発生ほ場からの土の移動の危険がある場合には、農業機械の洗浄等の対策を講じる。
- (5) 貝が水稻に被害を及ぼすのは田植え後、約3週間までで、その間、水深を出来るだけ浅く保つ。水深1cmが理想だが、4cm以下に保つと実害が出にくい（貝は水中でのみ摂食する生態のため）。
- (6) 圃場の均平が重要である。圃場が凸凹だと深いところの株が食害され、一方、土が水から長時間露出すると除草剤の効き目が劣ってくる。田植え前に圃場の高低を修正するとともに、被害が生じやすい田植え直後は極く浅水とし（一部の土が水面上に出ても）、徐々に水深を増加させるなどの工夫が必要。
- (7) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

詳細は、令和3年4月2日付け「防除所ニュース令和3年第3号」を参照のこと。

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2021_03.pdf

果樹

1 カキ カキノヘタムシガ、カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

2 ブドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) ハウス栽培では開花前から換気に努め、予防散布を徹底する。
- (3) 果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

薬剤散布は萌芽期及び一葉期に行う。多発園では2回防除を行う。

2 チャトゲコナジラミ

5月中旬の巡回調査で発生園を認めた。ほ場をよく見回り、発生の多い園では注意する。

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(5月17日から6月16日までの天候見通し)

令和7年5月15日
大阪管区气象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。特に、期間のはじめはかなり高くなる見込みです。前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は、近畿太平洋側では多く、近畿日本海側では平年並か多いでしょう。日照時間は、近畿太平洋側では少なく、近畿日本海側では平年並か少ないでしょう。

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	1 0	3 0	6 0
降 水 量 近畿太平洋側	2 0	3 0	5 0
近畿日本海側	2 0	4 0	4 0
日 照 時 間 近畿太平洋側	5 0	3 0	2 0
近畿日本海側	4 0	4 0	2 0

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側では平年比多く、日本海側では平年並か多く、日照時間は太平洋側では平年比少なく、日本海側では平年並か少ないと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病虫害発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （１）前年１０月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
（２）４月中旬現在、山城で平年比多く（＋）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	４月の調査結果	４月 平年値
山城	綴葉数 (/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数 (/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率 (%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数 (/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数 (/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数 (/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数 (/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （３）４月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
（２）通常、第１回目のふ化期は５月末～６月始めで、４回世代を繰り返す。
（３）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（－）、（＋）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（－）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（＋）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病虫害の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農業協同組合にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成 9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－